

大会伝道の検証「これまでの大会伝道を振り返って」 —今後の大会伝道のために—

大会伝道局書記 齋藤 修

大会伝道局の働きをいつも覚え、祈り様々な形で支えて下さいますことに感謝いたします。

大会伝道局では、この数年来これまでの大会伝道を振り返り、今後の大会伝道のための提言を大会に報告するための準備をしています。現時点においてそこから見えてきましたいくつかの事を今回は記したいと思います。

1. これまでの大会伝道を振り返って

日本キリスト教会は現在も継続中の沖縄、岡山の両伝道所を含め、国内11か所を大会伝道地として指定してきました。当初は、いわゆる人口密集地への伝道を目的に、例外もありますが、主に県庁所在地が指定されました。1969年からは議員建議という形で大会伝道地指定がなされ、1982年以降は中会推薦という形となっています。

指定された個々の群れはその地に在って其々の課題を担いつつ、伝道と群れの形成に励み、今日に至っています。その歩みを顧みる時、教会の主の守りと導きに感謝すると共に、多くの労苦も覚えずにはられません。私たちはそのことを改めて想起したいと思います。私たちは大会伝道地の群れの労苦を本当に共に担ってきたのでしょうか。

一つは、場所の問題です。当初、大会伝道地は日本キリスト教会会員がどこに転居しても日本キリスト教会の礼拝に出られるように、との思いも含めて全国を視野として指定されました。しかし、土地購入の際、群れは費用の面を考慮し、伝道にとって必ずしも好条件とは言えない場所を入手した事が多かったように思えます。それ故、土地購

入の際は改めて全教会の支援の下可能な限り好条件の所を購入する必要があります。

次に、大会伝道地を指定しすぎたという面はないでしょうか。

以前経済的援助は基本的に10年であったとも聞きます。実際は必ずしもそうではないのですが、1955年から2001年の間、同時にいくつかの大会伝道地に援助をしていたでしょう。多くの大会伝道地に同時に援助をするため、相対的に個々の群れへの援助額とその期間が十分とは言えず、当該地の経済的負担が増え、結果として伝道と群れの形成に支障をきたした面はなかったでしょうか。ある大会伝道地では牧師交代の際、退職謝儀を蓄えていなかったそうです。

第3に、人間の問題です。大会伝道地は一から群れを形成することが大半です。それ故、群れを散らさないよう細心の注意をします。しかしそれ故、伝道者や群れが内的困難を抱えつつ孤立する事もあったのではないのでしょうか。また、群れが同志的交わりとなり、教会としての公同性、教会性が育まれにくい中で大会伝道地として牧師や群れへの重荷が増す事はなかったのでしょうか。

2. 今後の大会伝道のために

上記した諸課題を克服するためにも、宣教理念の再検討が必要でありましょう。その際、現状から予想される牧師不足、財政的困難も考慮せざるをえないでしょう。従来とは異なる視点が求められています。その意味で、真実の教会を目指しての新たな大会伝道です。日本キリスト教会全ての群れの前進に資する大会伝道を目指しています。

新たな年を迎えて

岡山伝道所委員 石井 賢一

この春も教会の庭のドウダンツツジが、小さな花をつけ始めました。白い釣鐘のような可愛い姿です。冬の間は細い小枝ばかり、枯れたのではと時々そっと指で曲げてみたりしました。折れない…生きている、と安心します。その他にも皆の奉仕でチューリップや、黄色、白、紫などのいろいろな花（私は名前が分かりません）が咲いていて、さっそくホームページの花壇欄に写真を掲載しました。

さて今年の伝道所の歩みを、1月25日の総会からご紹介しましょう。昨年末の降誕節礼拝に2名の受洗者と1名の転入者が与えられ、大きな恵みの喜びがまだ冷めやらぬ間の総会でした。二つの建議案が提出されました。一つは2名の「執事係」の設置です。様々な心配り（清掃、花壇の手入れ、週報発送、礼拝案内、図書整備、給仕等々）を率先して行い、また他の教会員にも働きかける奉仕をします。二つ目は「コイノニアの集い」（毎月最後の週の礼拝後）の発足です。これは婦人会を発展的に解消し、すべての教会員、客員、求道者が礼拝後に信仰生活を中心とした語り合いを持ちます。テーマを決め関係テキストも用意して、輪番制で意見を発表します。これら二つの案はいずれも可決されました。総会で建議案が出ることはうれしいことです。

次に2月は、各種奉仕者を教会員にお願いしました。前述の執事係、教会学校、奏楽、墓地会計、伝道、修養会、ホームページ、コイノニアで、全員がどれかに属しています。

4月5日のイースター礼拝では同時に、教会15周年を祝う礼拝をもちました。3人の委員により「15年の歩み」が読み上げられ、まず大会、中会の大きな計画の下に始められた開拓伝道であることを覚えました。前史である立田伝道所の小さな歩みは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには…」（マタイ18:20）を覚えながらも神のみ心を問い続ける、そんな19年でした。2001年4月から現在の伝道所の礼拝が始まり、以後2回の無牧を経験しました。開始直後の悲しみ、痛み、不安の中で、中会の諸教会の応援で礼拝が守られたことは何より感謝でした。三瓶先生が着任されてから早や7年を過ぎましたが、礼拝の喜びを再確認し、そのためのあらゆる物事が整えられてきました。その中で、教会形成の上でどうしても守らなければならないこと、その他の人間的なこだわりを除くことを学びました。こうして15年の歩みの恵みを、全員が感謝したのです。

お祝いの礼拝が終わって食卓を囲み、その後はそれぞれの委員の話し合いが始まりました。コイノニアは春の遠足のこと、修養会は今年の「祈り」の学

びについて、ホームページは規約のことです。伝道委員は伝道礼拝の折込チラシの相談でした。これはその結果がどうであれ、まだ見ぬ方々への奉仕です。子どもが来ていなくても語られる子ども説教、私はそんなことをふと思い出しました。

今年の信徒大会、宿泊予約をとりました。1人でも多く参加できるよう祈っています。



沖縄伝道所の近況

沖縄伝道所委員 桑 正 幸

沖縄伝道所の近況をお伝えします。沖縄伝道所は沖縄島中部の街、県庁所在地の那覇市から車で20分ほどの西原町にあります。現在の沖縄伝道所は10名ほどの小さな群れですが、大会伝道地として全国の教会の皆様におぼえられ、支えられて今年で43年目になります。この西原町のすぐお隣、宜野湾市には宜野湾告白伝道所（島田善次牧師）があります。また、沖縄伝道所のある沖縄島から南西へ約400km離れた石垣島で、石垣家庭集会がまもられています。2013年には全国連合婦人会修養会がここ沖縄で開催され、多くの方々が沖縄伝道所、宜野湾告白伝道所を訪問されたことは記憶に新しいことです。この大会伝道局報をご覧のみなさんの中にも、両伝道所にいらっしゃった方もおられることと思います。

その沖縄伝道所が建つ（正確には建っていた）西原町棚原地区は、西原町西地区土地区画整理事業の真っ最中にあります。沖縄伝道所は2013年11月から会堂があった土地を離れ、同じ西原町内のビルの2階に入居中です。このビルは西原町内の交通量の多い交差点の角地に建つビルで、伝道所の入居している部屋は角部屋です。大きな窓があり明るい部屋なのですが、夏の沖縄の太陽に

照らされるとさすがに暑いのです。そこで、窓ガラスには市販の大型クッション材を貼り付け、防音を兼ねた断熱材としています。旧会堂から移設したクーラーもありますし、支障なく礼拝をまもることができています。あと3年はこのビルの一室で聖日礼拝をまもることになっています。将来的には、新会堂ではこの沖縄の強烈な太陽を生かして太陽光発電を行い、電気代を少しでも節約するといった取り組みも必要となるかも知れません。

さて、みなさんの教会は子供の礼拝をどのようにしていますか？沖縄伝道所では、子供も大人も一緒に礼拝をまもっています。礼拝では聖書朗読のあと、子供説教の時間を設けて大人も子供も一緒に礼拝をまもれるよう工夫しています。こういう工夫があるのですが、私自身は自分の子供と一緒に聖日礼拝をまもることが出来ていません。これは私にとっての課題（信仰の継承という課題）です。

今、沖縄伝道所では長期礼拝欠席者に寄せ書きをして送ることを考えています。

以上、まとまりのない文章となりましたが、沖縄伝道所の近況報告です。



沖縄の教会の祈りに祈りを合わせる

九州中会前伝道委員長 澤 正 幸

沖縄伝道所の会堂が区画整理事業のため撤去され、沖縄伝道所が仮集会所で礼拝を守り始めてから、一年半が経とうとしています。約束の地に入るまでイスラエルが荒れ野を旅し、天幕住まいを続けたように、沖縄伝道所も新会堂が完成する日まで、長い仮住まいの日々が続きます。

その間、九州中会伝道委員会として沖縄伝道所の歩みを覚えて祈るべきことは、一つには伝道所の伝道と教会形成に歩みが主によって守られ、支えられることですが、今日はもう一つの祈りの課題について、全国の教会に覚えていただきたいと思います。それは沖縄の地にある教会が抱える基地問題についての祈りを、沖縄の教会と共有するという課題です。

日頃、一つ同じ中会に連なる教会でありながらも、九州の教会と沖縄の教会との間に距離感、遠さを感じさせられます。それは中会に出席するのに飛行機を使わなければならない地理的距離だけのことではありません。その距離感・遠さは九州の者が沖縄に対して感じるよりも、沖縄の群れが本土の教会に対して感じる方が、より強く、大きいようです。その距離を埋めようとして九州中会では毎年一回、伝道委員による沖縄問安を続けています。しかし、毎年それを続けていても、問安のときに率直にぶつけられるのは、沖縄と本土の教会の隔たりがどうしても縮まらないのかという、苛立ちにも近い思いです。沖縄の人々が本当に願っていること、悲しんでいること、怒っていることが本土の人々に伝わらないもどかしさ、本土のマスコミなどは沖縄の真の姿を伝えていない、真の問題を取り上げない、「九州中会の教会は沖縄の新聞を購読してもらいたい」といった沖縄の教会の思いです。

今、それが端的に現れているのが、辺野古の新

基地建設問題です。沖縄の人々が県知事選挙や国政選挙であれだけ明確に新基地建設反対の意思を表明しているのに、政府は沖縄の人々の声に耳を傾けようとしない。公然とまた平然と沖縄の人々の意思を無視するような態度で新基地建設を推進しようとしています。そのような政府の背後に、それを支持している本土の人々がいるのではないか、いや、本土の人々だけでない、一つ信仰の交わりにあるはずの教会の中にも隔たりがあるのではないか、そう沖縄の教会から問われるとき、心が痛みます。

すぐる九州中会に沖縄の二つの伝道所が提案者となって、「私たちは沖縄県内の新基地建設に反対する」という声明文を出すとの建議案が提出されました。沖縄の人々の思いを受け止めて祈る沖縄の教会の祈りに連帯し、その祈りを共に祈ることを九州中会は建議案を採択することによって表明しました。

ひとりの主をかしらとする教会として、沖縄の教会の真剣な祈り、平和への心からの叫びを共有して、本土の教会もまた沖縄の教会の祈りを共に祈ることが課題として求められています。今、沖縄の教会は全国の教会に共有して欲しい祈りとして、平和を求める祈りを祈っています。その祈りが共有されることは、沖縄の教会にとって何よりの支えであり、励ましなのです。

今年度前半の大会応援伝道

加西伝道所 5月31日(日)

講師 宇田 達夫

(稲田堤伝道所牧師)